Osaka University Knowledge Archive

Title	国民を作り上げる ： 現代マレーシアにおけるネーションの想像／創造に関する人類学的研究
Author(s)	上田, 達
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59335
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【３】

氏　　名	上田　達（うえだ　とおる）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２４８７３　号
学位授与年月日	平成23年９月20日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**国民を作り上げる　—現代マレーシアにおけるネーションの想像／創造に関する人類学的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　中川　　敏 （副査） 教　授　栗本　英世　　准教授　森田　敦郎

論文内容の要旨

本論文は、グローバル化の進む現代においてナショナリズムがいかなる位相を占めているかをマレーシアの事例から明らかにした。マレーシアにおいて、マレーシア国民は「バンサ・マレーシア（Bangsa Malaysia）」と呼ばれる。異なる論理階型にまたがるバンサ概念が人々にどのように解釈されているのかを分析することを通じて、思考の枠組みとしての国民がどのように作り上げられているのかを示した。

現代世界を特徴付けるキーワードとして、脱領域化、グローバル化、トランスナショナリティが使われるようになって久しい。これらに共通しているのは国民国家を単位とした思考のあり方からの脱却や、別のアスペクトの提示である。確かに情報技術や交通・輸送手段の発展は、これまでにない規模で世界を空間的に圧縮して、新たな世界像の構想を容易にしたといえる。また、東西冷戦以降の政治ブロックの崩壊と新たな政治ブロックの形成は、第二次大戦以後の世界を形作っていた国民国家を単位とした旧来の世界秩序を二次的なものへと後退させるだけのインパクトを有した。グローバル化の進行にともなって、国民国家はその存在基盤を失っているかのようだが、実際にはそうではない。グローバル化の進行と政治体制としての国民国家は相補的な関係にある。グローバル化の進行と国民的秩序の双方が成立しうる。現代においても国民国家は不断に想像力を喚起しながら人々にとっての現実を構成する。こうした接点がある限り、人々の日常性を記述・分析することを主題に掲げる人類学が国民国家と向き合う必要は増している。

共同体としてのネーションが文化的な構築物であるとするアンダーソンやゲルナーの議論は、人文社会科学の研究対象としてネーションの捕捉を可能にする。ここで問うべき問題は、アンダーソンがいうように、あるものにとっては虚構に見えるものが、どうして他の者には真正に見えるのかである。この問いに対する一つの答えは、ある図式のパターンが反復的な実践と時間的な経過によって人々の理解として成立するプロセスを分析的に記述していくことである。本論文は、国民を作り上げるプロジェクトに人類学的な視点からアプローチする試みである。理念化されたスローガンが国民を作り上げるのではなく、それらが日常の中で生きられることによって国民の想像と創造が可能になる。K 集落というローカルな場所において、マレーシアにおけるナショナリズムがいかなる立ち現れをしているかを見定めることを本論文は目指した。

本論文はサバ州における都市集落で行ったフィールドワークに基づいている。最初の現地調査は経済企画局の許可を2003 年に受けた後2004 年11 月までのおよそ一年半にわたる。その後、六度に渡って渡航して短期の追加調査を行って情報の更新に努めた。調査の合計期間は約二年に及ぶ。

本論文はサバ州における都市集落で行ったフィールドワークに基づいている。最初の現地調査は経済企画局の許可を2003年に受けた後2004年11月までのおよそ一年半にわたる。その後、六度に渡って渡航して短期の追加調査を行って情報の更新に努めた。調査の合計期間は約二年に及ぶ。

本論文は二つの部分に大別される。前半部（第三章、第四章）は国民としてのバンサの語りが持つ特質を描き出し、K集落の事例を解釈するための概念の整理を行った。主に政府の語り方を分析して、その特徴を指摘した。これに対して、後半部はK集落における民族誌的な記述が中心となる。後半部（第五章、第六章、第七章）においては国民としてのバンサの語りが、どのように人々の生活に接合されているかをK集落における民族誌的な記述を行うことで示した。

第二章では調査の概要を述べた。まず、調査を行った東マレーシア・サバ州の州都であるコタキナバルの中心部に位置するK集落が占める特殊な社会的位相を示した。どのように彼らの集落が形成されてきたのかの法的な根拠に言及して概観を得た。第三章と第四章は、マレーシア政府によるバンサに関する語りの分析を行った。第三章は民族としてのバンサが国民としてのバンサに組み込まれるプロセスをまず明らかにした。主に独立後の時代にスポットを当てて、カダザンあるいはドゥスンというカテゴリーの重なりとずれについて述べた。第三章の後半では、創出された民族としてのバンサが国民文化に接ぎ木された際の語り方について、政府が主催する文化イベントを事例として分析した。K集落を成立させている与件としてのカテゴリーである民族としてのバンサ（カダザンドゥスン）、国民としてのバンサ（マレーシア国民）の歴史的成り立ちを描いた。第四章では国民を作り上げる語りが持つ時間的性向を示す。愛国歌と呼ばれる歌の歌詞を取り上げて、国民を作り上げるプロジェクトの時間軸を示した。第三章の最後で指摘した並置と並んで、時間軸の特殊性は、バンサとしての国民の語り方の特徴である。

続く第五章からがK集落における民族誌的記述である。K集落において国民を作り上げるプロジェクトがどのように進められているかについて、人類学的なフィールドワークに基づき記述した。第五章ではK集落で行われている収穫祭（*Pesta Kaamatan*）を取り上げた。収穫祭は、サバ州の先住民族の間で稲の収穫時に行われていた祭礼である。しかし、収穫祭は、植民地期においては植民地政府が、独立後は州政府および連邦政府など外部のエージェントが執り行う文化的行事としての地位を獲得した。サバ州における政治と文化の磁場において、国民文化の一つとして定位されるようになった収穫祭は、K集落においても受容と対抗を喚起しつつ、顔の見える関係性において再演されている。第五章では、国民文化としての収穫祭が公的な場においてもインフォーマルな場においても政府のゲームから大きく逸脱することなくK集落で実施されることを指摘した。

第六章では国民を作り上げることを目的とした一種の隣組組織であるルクン・トゥタンガ（*Rukun Tetangga*）を対象とした。国民としてのバンサを語る上で鍵概念となっている「統合」が、ルクン・トゥタンガをめぐる語りにおいて多様な語り方を許容する。多様な解釈がありながら、統合という概念が人々の日常的な語彙として定着していることを示した。

第七章では2009年にK集落で起きた立ち退き要請とそれへのK集落の対応について記述した。第七章では「居座り」という概念に依りつつ、集落が残るときに不可避に立ち現れるのが国民としてのバンサであることを指摘した。

本論文は国民を作り上げるプロジェクトがずれをはらみつつもK集落において進められていることを指摘した。国民を作り上げるプロジェクトは理念とは違う形でずれや逸脱をはらんでいる。何らかの誤解がそこにあることを指摘するのはたやすい。しかし、国民を作り上げるプロジェクトは、人々の傍らに位置して人々の語りに取り込まれている。政府は独立という出来事と繁栄した未来をつなぐ時間軸において、統合された国民を語る。このヴィジョンのもとで、各種の政策が実施される。国民統合と経済発展というベクトルは、K集落にも向けられている。「一時的な集落」と人々が語るK集落において、国民を作り上げるプロジェクトが掲げるバンサのヴィジョンが立ち現れているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、グローバル化の進む現代におけるナショナリズムを、村落レベルから研究した論考である。調査地はマレーシア、サバ州のスクォッター集落 K、調査の合計期間は約２年間に渡る。

現代世界における国民国家を、申請者は、グローバル化と相補的な関係にあるものとして論を組み立てる。ナショナリズムがいかに日常生活に組込まれているのか、また再構築されていくのかを、申請者は詳細な人類学的なフィールドワークに基づいて、ときあかしてる。

論文の序論にあたる部分で、ナショナリズムをめぐる先行研究の整理がされ、調査地が紹介される。

続く論文の前半部（三章と四章）において、民族誌の背景となる政府レベルの言説が整理される。(1) 植民地時代以来のマレーシアの「国民」および「民族」（ともに「バンサ」という語で示される）の使用に関する詳細な歴史、そして(2) K 集落に住まう人びとの名称、「カダザンドゥスン」という語の成立する複雑な政治的な歴史が、それぞれ整理される。

そのような歴史を押さえた上で、申請者は現代における政府の語りを分析していく。政府主催のある文化イベント、そして政府が後押しする「愛国歌」が、時間概念に注目しながら分析され、ナショナリズムが独特な時間観念を持つことが示される。

後半部（五章、六章、七章）は詳細な民族誌である。(1) 五章では政府によってカダザン・ドゥスンの「伝統」とされた「収穫祭」のK 村落での上演が、(2) 六章では、政府によって導入された隣組組織が、そして、最後に (3) 七章では、「立ち退き命令」をめぐる出きごとが、それぞれ記述・分析される。

申請者は、それぞれの出来事をめぐる村人の多様な解釈を提示していく。その多様な解釈の中に、民族（「バンサ」）としてのカダザン・ドゥスンを越えて、国民（「バンサ」）が浮かび上がってくるのである。それはナショナリズムが日常の中で生きられ、同時に、作られていく過程である。それは、単純な「政府のプロパガンダに従順に従う国民」像によって説明できるものでもなく、また同じくらい単純な「政府に抗する村人」像でも説明できない、日常生活に深く織り込まれた複雑な過程なのである。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認める。